



令和2年6月24日
十日町市文化財課

「究極の雪国とおかまち—真説！豪雪地ものがたり—」が 日本遺産に認定されました

令和2年度「日本遺産」について、6月19日付で十日町市のストーリーが認定されました。日本遺産を契機として、地域の歴史文化の魅力の発信と歴史文化を活かした地域活性化事業に、関係団体や民間企業と連携して取り組みます。

1 日本遺産について

地域の歴史的的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」に認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図るものです。

○ストーリーのタイプは2種類

- ・「地域型」・・・単一の市町村内でストーリーが完結
- ・「シリアル型」・・・複数の市町村でストーリーが展開

○2020年までに100件程度の認定が予定されていたところ、平成27年度以降、令和2年度までの6年間で104件が認定された。新規認定の募集については、今年度の募集をもって当面最後となる。

○今年度は、申請69件に対して21件が新たに認定された。

2 十日町市の日本遺産への取組経過

①平成28年度 認定

『「なんだコレは！」信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化』

(新潟市・三条市・長岡市・魚沼市・十日町市・津南町のシリアル型)

②平成29年度 十日町市歴史文化基本構想策定 (地域型申請の必要条件)

③令和2年度 認定

「究極の雪国とおかまち—真説！豪雪地ものがたり—」(地域型)

3 添付資料

①認定されたストーリー資料

②令和2年度「日本遺産」認定一覧

■お問合せ先

十日町市文化財課文化財保護係 担当：村山

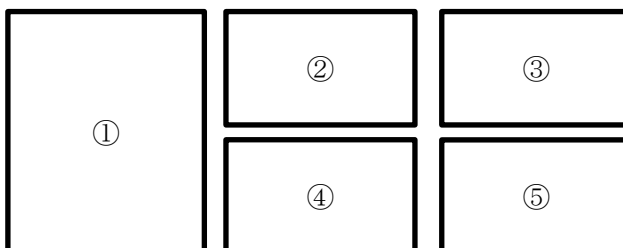
☎025-757-5531 (十日町市博物館内)

令和2年度日本遺産 十日町市ストーリー

① 申請者	新潟県十日町市	② タイプ	地域型
③ タイトル			
(ふりがな)	きゅうきよくのゆきぐにとおかまち —しんせつ！ごうせつちものがたり—		
究極の雪国とおかまち —真説！豪雪地ものがたり—			
④ ストーリーの概要			
<p>世界有数の豪雪地として知られる十日町市。ここには豪雪に育まれた「着もの・食べもの・建もの・まつり・美」のものがたりが揃っている。人々は雪と闘いながらもその恵みを活かして暮らし、雪の中に楽しみさえも見出してこの地に住み継いできた。ここは真の豪雪地ものがたりを体感できる究極の雪国である。</p>			
			
豪雪地の着ものがたり	豪雪地の食べものがたり	豪雪地の建ものがたり（神宮寺）	
			
	豪雪地のまつりものがたり（婿投げ）	豪雪地の美ものがたり（清津峡） マ・ヤンソン/MAD アーキテツツ「Tunnel of Light」	



写真



②③⑤ Photo by Tsutomu Yamada

ストーリー

究極の雪国

日本の国土のうちおよそ半分は「雪国」である。中でも、日本の中央部に位置する新潟県十日町市は、市街地でも平年の積雪深が2mを超える世界でも有数の豪雪地。「雪国」の中の「雪国」である。

この地に大量の雪が降るようになった縄文時代中期以来、人々は雪と闘いながらもその恵みを活かして暮らし、現在まで住み継いできた。

ここには、豪雪に育まれてきた歴史と文化の「ものがたり」がある。



豪雪時の登校の様子

豪雪地の着ものがたり

日本列島ではカラムシなどの植物繊維を素材とする編布の伝統が縄文時代から続いていたが、中世の法衣を最後に途絶えたといわれ、長らく「幻の布」といわれていた。しかし、全国でも十日町市周辺にのみ「アングイン」等の名で残存し、主に農民の作業衣として近世まで製作・使用されていた。最後の作り手といわれた人からの聞き取りによって奇跡的に製法が復元・伝承され、現在も編み継がれている。

一方、越後では古代からカラムシの繊維でつくる「青苧^{あおぞ}」を材料とした上質な麻織物「越後布」が生産されていた。戦国時代、青苧や越後布は上杉氏の度重なる戦の費用を賄う重要な財源となった。江戸時代になって越後布に改良を重ね、より高い付加価値を生み出したのが特産品「越後縮」である。越後縮は將軍家や大奥などでも愛用された。主産地であるこの地域には縮市が開設され、京、大阪、江戸から商人が盛んに出入りし、取引の中心地として大いに栄えた。越後縮は一反を織るのに数ヵ月もかかる。外仕事のできない冬の間、辛抱強さで知られた越後の女性たちの繊細で地道な手仕事によって、美しい文様の夏物の布が織り出された。雪国の冬は湿度が高く、乾燥を嫌う青苧を扱うのに適していた。また、糸や布を漂白するための「雪晒し」の工程は、春の晴天時に雪の残る豪雪地でなくてはできない。越後布・越後縮は、まさに豪雪地の地域性を存分に生かしたブランド品だったのである。



昭和初期の十日町織物の宣伝ポスター（竹久夢二画）

江戸時代末期、十日町でも絹織物が生産されはじめ、養蚕も盛んに行われるようになった。明治期になると生産の主流は青苧の麻織物から生糸の絹織物へと劇的に転換する。そして農家の副業から工場制の工業へと生産構造の変革が起こり、現代に続く絹織物産地としての体制が確立した。この革新の原動力となったのは、豪雪によって育まれた人々の苦難に負けない忍耐強さと、時代のニーズを捉えより良いものを生み出そうとする意志の強さであった。それが現代の十日町市のきもの産業の礎である。

豪雪地の食べものがたり

豪雪地では、雪で大地がふさがれる期間が4月頃まで続く。そのため植物の芽吹きは遅くなり、積雪期は土を耕す農業もできない。この長い冬を凌ぐため、人々は秋までに採れた食料を備蓄し活用することにこのほか心を砕いた。山菜やキノコは塩に漬けたり干したりしておく。大根などの野菜は、ワラで覆い雪の中で保存すると凍らず長持ちした。また、「雪穴」や「雪室」に大量の雪を貯めておき、夏になるまで食料の冷蔵に利用した。



雪解け水を用いる棚田 ※1

十日町市を含む魚沼地域では雪国の風土や地形を生かした稲作が盛んで、全国でも屈指の米どころである。傾斜地に展開する「棚田」の維持は豪雪によるところが大きい。また「へぎそば」は、織物の糸の糊付けに使う海藻「布海苔」をつなぎとして加える。このことによりツルツルとした独特の食感と抜群の風味が生まれ、当地の名物となっている。

冬の代表的な保存食「ツケナ」（野沢菜漬）は、春先に発酵が進んで酸味が増すと、塩抜きして煮込み「ニーナ（煮菜）」に生まれ変わる。厳しい冬を生き抜くため、人々の知恵が育んだ豪雪地の食文化は、豊かな自然の恵みを活かした郷土料理として今も受け継がれている。



ニーナ（煮菜） ※1

豪雪地の建ものがたり

雪国の冬、人々は一日の大半を家で過ごす。家は生活の拠点であり、作業場であり、食料・燃料などの貯蔵場でもある。その大切な家を雪から守ることは、雪国の人々にとって極めて重要な永遠のテーマである。

建造物に太い柱や梁を使い強固な構造とすることはもちろん、急勾配の茅葺屋根や農家の「中門造り」、梁を伸ばして深い軒先をつくる「船桡造り」などの建築様式は、先人たちの雪との闘いの歴史を表している。

秋のうちに、建物を板で覆う「雪囲い」をしておき、風雪から守る。また、深雪の中から家を掘り出すかのような屋根の除雪「雪堀り」は、豪雪地で暮らす人々の宿命ともいえる作業で、危険を伴う重労働であった。現在市内では、居住部分を2・3階に配した高床式の住宅や、落雪・融雪屋根の住宅、耐雪住宅が普及している。雪国に建つ家々は、雪と闘い共生してきた人々の知恵と工夫の結晶である。

豪雪地のまつりものがたり

十日町市では、新婚の男性を雪の中に投げ落とす「婿投げ」や、「ホンヤラドウ」と呼ばれる雪の小屋をつくる鳥追いなど、雪国ならではの伝統行事が行われている。「節季市」は、もとは農家がワラ細工などを商った市で、現在も毎年1月に開催されている。子犬や十二支をかたどった米粉細工「チンコロ」が売られ、縁起物として人気を集めている。

昭和25年に始まった「十日町雪まつり」は、厳しい冬の暮らしを少しでも明るくしようという市民の思いから生まれた。集落や職場単位で製作される精巧な雪像は、世代を超えて継承されてきた技術と経験があってこそできる「雪の芸術作品」である。そのひとつひとつに、ともに助け合って雪国で生きてきた人々の連帯と、「雪を敵とせず友としよう」という十日町雪まつりの精神が表れている。雪に親しみ雪を楽しむ様々なまつりやイベントが、十日町市の白い冬を鮮やかに彩っている。

豪雪地の美ものがたり

十日町市には、四季の移ろいによって全く違う表情を見せる、豊かで特徴ある景観が形成されている。棚田が広がる里山や、薪炭林として利用されたブナ林の風景からは、豪雪地の人々の知恵とたくましさを感じることができる。また、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」の舞台でもある十日町市には、「清津峡」の柱状節理の雄大な景観と現代アートとが一体となった空間など、新たな魅力も生まれている。

縄文時代の遺跡の出土品も数多く、特に「火焰型土器」の圧倒的存在感は、5,000年の時を経てなお、人々を魅了してやまない。また、古代から時代を捉えた意匠で作られてきた十日町市のきものは、1,500年もの間多くの人々に愛され続けている。豪雪地の美は、冬の静寂の中で研ぎ澄まされた雪国の人々の感性から生み出されたのである。

雪国の究極の春ものがたり

毎年11月頃の初雪から、半年近くにも及ぶ積雪期。すべてを白く覆いつくしていた雪が消えて土が顔をのぞかせる4月頃、雪国に春が到来する。花は一斉に咲き、ブナの芽がほころび、命が躍動する世界へと変貌を遂げる。「梅も桜もみな開く」と十日町小唄にも歌われるほど、その様は劇的である。しかし、春から秋までの間も、人々は次の雪の季節への準備を怠ることはない。やがてまた初雪が降り、白く長い冬が始まる。

このように無雪期と積雪期とで別世界が出現する中、人々の暮らしは営々と続けられてきた。人々は、雪と闘い、雪を受け入れ、雪を活用し、雪に親しみ、雪に楽しみさえも見出して生き抜いてきたのである。十日町市は、豪雪とともに生きる暮らしと豪雪を友とする心が、縄文時代から受け継がれて今に息づく「究極の雪国」である。ここで日本文化の深奥ともいえる真の「豪雪地ものがたり」を体感してほしい。



屋根雪を除く作業「雪堀り」



節季市の名物「チンコロ」 ※1



越後妻有雪花火／Gift for Frozen Village ※2



国宝 火焰型土器



雪国の究極の春景色 ※1

令和2年度「日本遺産(Japan Heritage)」認定一覧

番号	道府県名	申請者 (◎印は代表自治体)	ストーリーのタイトル
1	北海道	◎標津町, 根室市, 別海町, 羅臼町	「鮭の聖地」の物語 ～根室海峡一万年の道程～
2	岩手県	◎二戸市, 八幡平市	”奥南部”漆物語 ～安比川流域に受け継がれる伝統技術～
3	茨城県, 山梨県	茨城県(◎牛久市), 山梨県(甲州市)	日本ワイン140年史 ～国産ブドウで醸造する和文化的結晶～
4	栃木県, 茨城県	栃木県(◎益子町), 茨城県(笠間市)	かさましこ ～兄弟産地が紡ぐ“焼き物語”～
5	東京都	八王子市	霊気満山 高尾山 ～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～
6	新潟県	十日町市	究極の雪国とおかまち —真説！豪雪地ものがたり—
7	福井県, 滋賀県	福井県(◎南越前町, 敦賀市), 滋賀県(長浜市)	海を越えた鉄道 ～世界へつながる 鉄路のキセキ～
8	山梨県	◎甲府市, 甲斐市	甲州の匠の源流・御嶽昇仙峡 ～水晶の鼓動が導いた信仰と技、そして先進技術へ～
9	長野県	千曲市	月の都 千曲 —おぼすて たなだ まか かしぎ つきせき たごと つき— 摩訶不思議な月景色「田毎の月」—
10	長野県	上田市	レイラインがつなぐ「太陽と大地の聖地」 ～龍と生きるまち 信州上田・塩田平～
11	静岡県	◎藤枝市, 静岡市	日本初「旅ブーム」を起こした弥次さん喜多さん、駿州の旅 ～滑稽本と浮世絵が描く東海道旅のガイドブック(道中記)～
12	京都府, 滋賀県	京都府(◎京都市), 滋賀県(大津市)	京都と大津を繋ぐ希望の水路 琵琶湖疏水 ～舟に乗り、歩いて触れる明治のひととき
13	大阪府, 奈良県, 和歌山県	大阪府(◎河内長野市), 奈良県(宇陀市), 和歌山県(九度山町, 高野町)	女性とともに今に息づく女人高野 ～時を超え、時に合わせて見守り続ける癒しの聖地～
14	兵庫県	◎伊丹市, 尼崎市, 西宮市, 芦屋市, 神戸市	「伊丹諸白」と「灘の生一本」 下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷
15	奈良県, 大阪府	奈良県(◎三郷町), 大阪府(柏原市)	もう、すべらせない！！ ～龍田古道の心臓部「龍の瀬」を越えてゆけ～
16	和歌山県, 大阪府, 奈良県	◎和歌山県(和歌山市, 橋本市, 紀の川市, 岩出市, かつらぎ町), 大阪府(岸和田市, 泉佐野市, 河内長野市, 和泉市, 柏原市, 阪南市, 岬町, 河南町, 千早赤阪村), 奈良県(五條市, 御所市, 香芝市, 葛城市, 王寺町)	「葛城修験」 一里人とともに守り伝える修験道はじまりの地
17	島根県	益田市	中世日本の傑作 益田を味わう —地方の時代に輝き再び—
18	島根県	大田市	石見の火山が伝える悠久の歴史 ～”縄文の森” ”銀の山”と出逢える旅へ～
19	岡山県	高梁市	「ジャパレット」発祥の地 —弁柄と銅の町・備中吹屋—
20	長崎県, 福岡県, 佐賀県	長崎県(◎長崎市, 諫早市, 大村市), 福岡県(飯塚市, 北九州市), 佐賀県(嬉野市, 小城市, 佐賀市)	砂糖文化を広めた長崎街道 ～シュガーロード～
21	熊本県	八代市	八代を創造した石工たちの軌跡 ～石工の郷に息づく石造りのレガシー～